

授業アンケート結果 報告書

平成 28 年度(2016 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

全体総括

毎年、前年度の授業アンケート結果を集計した報告書を大学のホームページに掲載して、情報公開に取り組んでいる。授業アンケート結果は、前年度（平成 27 年度）と同様に、平成 28 年度においても、シラバス等に沿った予習・復習の取り組みが少ないなど、「学生の授業への取り組み」はまだ不十分な点がある。しかし、学科間で若干の違いはあるが「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義のある授業」が行われている。

1. はじめに

本学では、各教員の授業形態・質の向上や授業内容の充実を目指して毎年、前期・後期に 1 回ずつ常勤・非常勤を含めて全ての教員の各担当科目の受講学生を対象として、無記名で実習を含むすべての授業・演習・実習についてアンケート調査を行っている。アンケートは無記名であるが、教員自身がアンケートを行い、それを回収するため、アンケートの回答内容が教員に分からないようなアンケートの回収方法を含めた実施方法を各教員が遵守して行われている。

授業アンケートは、「学生自身の授業の取り組み」に関する質問が 5 問、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する質問を 7 問、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する質問を 2 問、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する質問が 1 問と、全部で 15 問の質問を行った。さらに、アンケート用紙裏面には、学生の意見を直接記入できる欄があり、各教員の授業に対する学生の「生の声」を反映させることができるようになっている。アンケートに授業内容を適切に反映させた回答を受講者に促すために、前期・後期の期末試験前までに授業担当者の判断で授業時間内にアンケートの回答を学生に行ってもらった。

授業アンケートの結果は集計され、授業科目ごとに各質問項目に対する 4 段階評価の度数分布図表やレーダーチャートを記載して各授業担当教員に返却している。4 段階評価点数が 8、3、2、0 点であるため、各授業科目に対する評価が厳格に表示されることになり、また、FDの一環として、学科内ですべての教員の担当科目の集計結果を閲覧することができるため、教員相互の講義参観などにより、各教員の授業の改善や向上に役立てることができた。平成 17 年度(2005 年度)以降、授業アンケートを実施して、このような授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施したが、平成 23 年度からは授業アンケート結果集計を公開して蓄積することにより、「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」本学の教育理念に相応しい教育が継続的に行われているか否かを評価できる有益な資料となると考えられた。

全学的アンケート結果としては、例年、「学生の授業への取り組み」はまだ不十分であり、教員から学生への予習・復習の喚起が必要である。また、「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義のある授業」が行われている。しかし、「学生の授業への取り組み」に関しては学科間での違いがあり、以下の個々の学科のアンケート報告内容を比較していただきたい。

2. 授業アンケートの実施方法

アンケート内容と実施の変遷について：

本学では、平成 17 年度 (2005 年度) より授業アンケートを実施している。授業アンケートの質問項目は適宜見直され、特に平成 22 年度 (2010 年度) から教員が授業を改善できるよう質問項目の見直しを行い現在に至っている。また、授業アンケート結果を年度間で比較し教員の授業改善に役立てるために、授業アンケートの質問項目は、同じ項目を使用しているが、平成 26 年から設問項目を 2 項目増やして実施している。各年度とも前後期に各 1 回、年 2 回アンケートを実施している。

アンケート対象学生数と教科について：

平成 28 年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成 28 年	前期	447	112	42	154	15919	18096
	後期	461	107	40	147	14151	17105

アンケート集計・解析方法とそのフィードバック方法について：

集計の後、各質問項目に対する度数分布表 (4 段階評価点数が 8、3、2、0 点) を作成した。大学全体、学部、学科、各科目単位で、質問項目を計算し、一覧 (平均値一覧表) にまとめた。授業アンケート結果については、科目担当者に配布するとともに、授業アンケート集計表 (度数分布表・評価レーダーチャート) をまとめて学部長へ配付し、その後学科長が各学科において、授業アンケート結果をふまえ適切に授業改善につなげられるようにフィードバックを実施している。学科毎に専門が異なり授業方法なども多種多様なため、具体的な内容や方法は課題として残されている。

なお、平成 28 年度 (2016 年度) より、授業に対する学生の自由記述内容についてもデータ化を行っており、授業改善のための課題として整理する準備を進めている。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について以下に全学的結果あるいは各学科結果について個々に記載する。平成 28 年度アンケート結果は、過去の結果と比較して、学科間の相違や各学科での前期と後期の相違に着目してまとめた。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

アンケート結果で「教員の授業に対する取り組み」は、概ね達成されているが、「学生の理解度・達成感」では、学科間で若干違いが認められた。また、「学生の授業への取り組み」では、学科間で顕著な違いがあり、学生の授業における予習・復習時間やシラバスに対しする準備学習が不十分である学科が見受けられる。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われていると考えられるが、これまでのアンケート結果と同様に、学生の勉学に対する受け身の姿勢を改善する方策について各学科で検討する必要があると思われた。

「学生自身の授業の取り組み（Q1～5）」

平成 28 年度の前期・後期に関わらず、多くの学科の授業で 4 回以上欠席する学生は約 10%以下であるが、前期・後期ともにスポーツ健康福祉学科、臨床福祉学科、子ども保育福祉学科は他学部比べて欠席する学生の割合が多かった（Q1）。また、予習を行っている学生は、どの学科でも約 50%前後に留まっていたが、前後期通して臨床工学科では他学科より際立って高かった。（Q2）。復習に関しては、前期・後期を通して 60-70%の学生が復習を行っていたが、臨床工学科では他学部より特に多くの学生が復習を行っているようである（Q3）。シラバスに対する準備学習についても、全学的に十分行われているとは言い難い状況であった。しかし、臨床工学科では他学科より比較的準備ができていた学生の割合が高い状況であった（Q4）。学生の授業に対する意欲は、前期・後期に関わらず、学科間で顕著な差は認められなかった（Q5）。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み（Q6～12）」

シラバスに沿った目標や習得すべき事項の説明（Q6, 7）、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力（Q8, 9, 10）、また、わかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか（Q11, 12）については、前期・後期に関わらず、約 90%以上の学生が教員の努力を感じている。また、昨年度までの生命医科学科の学生で、授業の雰囲気作り（Q9）、学生を取り組んだ授業形式（Q10）や教員の説明（Q11）に違和感を持っている学生が比較的他学科に比べて多かったが、これらの点について本年度は改善されたようである。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度（Q13・14）」

学生の理解度や学習意欲の高まり（Q13, 14）に関しては改善されているようであるが、前期・後期に関わらず生命医科学科では他学科より学生の理解度や意欲が若干低いようである。しかし、全体として学生の約 9 割の学生が授業を理解して、意欲があったと回答している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か（Q15）」

多くの学科では、授業に意義があまりなかったとする学生数が約 10%以下である。しかし、通年を通して、作業療学科、視機能療学科、動物生命薬科学科や生命医科学科では授業に意義があったとする学生数が他学科より若干低下していた。（Q15）。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は学年が上がるに従って欠席回数が多くなる傾向が見られるのは昨年度と同じ傾向である。後期になると1年生は大学生生活に慣れてきたせい、欠席回数が多くなる。2、3年は欠席数にさほど大きな差はなく、欠席する科目や学生が固定してきていることがうかがえる。【予習復習時間】では、1年生ではほとんどしなかったという学生が60数%いるが、これは去年の半数程度から比べると、状況が悪化していることになる。1年生からの予習復習が大事であることを、繰り返し伝える必要があることが分かった。【授業中の取り組み】を見ると、1、2、3年生の間に大きな差は見られないが、4年生の後期になると真剣に授業に取り組んでいることが分かる。これは卒論や試験勉強に力を入れた結果と推察する。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

授業の分かりやすさや講義資料の適切さに関しては、1年生の時代には不満を持つ者もいるが、学年が進むにつれて減っていく傾向がある。これは昨年度と同じ傾向で、大学の授業の進め方に慣れてくるからであろう。1年生の前期と後期の結果を比べてみても、そのことが分かる。また、学年が上がるにつれて科目担当教員への不満が減ってきているが、これは大学の授業に対する慣れによると思われる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度の「学習意欲」に関しては、前期1年生「あてはまる」と回答した学生が60%台と2、3、4年生と比べて低い数値である。このことは入学当初より学生に対してわかりやすい説明や指導が必要であると考えられる。ただ、昨年度は理解度や学習意欲が1年生の結果と4年生の結果がほぼ同じであったが、今年度は学年が上がるにつれて、理解度・達成度が上がっている。これはよい傾向といえるであろう。教員側の授業改善が進んだせいであろうか？

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

昨年は授業の意義について90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。今後は、将来の資格取得についても視野に入れながら学生の学習意欲を向上させ国家試験の合格に繋げていくことを学科が一丸となって取り組む必要がある。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果 (図Ⅳ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は1、2年において前期よりも後期に欠席回数が多くなる傾向があるが、3、4年においては大きな変化は認められない。欠席0回の学生の割合は1年前期約74%（昨年59%）から4年後期約46%（昨年16%）、1～3回欠席は1年前期約25%（昨年37%）から4年後期約46%（昨年67%）、4～5回欠席は1年前期約0.5%（昨年3%）から4年後期約8%（昨年17%）と、学年の進行に伴って欠席回数をコントロールして授業を休む学生が増える傾向はあるが、昨年度に比べ出席状況が改善されていることが認められる。【予習復習】は学年が上がるにつれ、「ほとんどしなかった」学生の割合は低下する傾向が見られ、予習では1年前期約60%（昨年58%）から4年後期約38%（昨年21%）、復習では1年前期約55%（昨年51%）から4年後期約31%（昨年18%）となっていた。【学習への意欲的な取り組み】では80%以上の学生が肯定的な回答している。昨年度に比べて出席状況については改善が認められたが、予習復習は「ほとんどしなかった」学生の割合が増加傾向にあった。資格試験に対する意識づけを高める指導を行い、全国平均を上回る合格率となっているが、意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化が生じているのかもしれない。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。また、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。また、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。「あてはまる」だけに着目すると68～91%（昨年55～75%）であり、昨年より改善されている。しかし、1年は前期・後期ともに68～70%であった。各教員は、大学へ入学して新たな環境で学習に取り組む始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善に取り組む必要があるだろう。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしており、4年の後期では昨年と同様に100%となっていた。学生の理解度・学習意欲の高まりと回答傾向が類似しており、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。「あてはまる」だけに着目すると75～96%（昨年60～77%）であり、昨年より改善されている。しかし、1年は前期・後期ともに約75%であった。本学科への進学に対する満足度を上げるためにも、特に新入生の段階から、今の学びが将来につながっていることを学生に授業を通して理解させながら、学習意欲の向上を図っていくことが重要である。

子ども保育福祉学科アンケート結果（図V）

「学生自身の授業の取り組み」

「Q1. 授業を何回欠席したか。」前期においては0～3回欠席が全学年において80%を超えている。後期は欠席0回の学生が約10%増え、改善がみられる。いずれにせよ前後期を通じて0～3回の欠席者が80%を超えている状況であり、出席状況は申し分ない結果であった。

Q2. Q3 をまとめると、「授業及びシラバス記載の事項について、どのくらいの予習・復習を行ったか」を聞くものである。全体的に見れば30分から1時間以上の学生が20%弱である。前後期に目をやると、1時間以上の割合が後期になって高くなる傾向にある。

「Q4. 授業のための準備学習」では30%の学生が「すべてやった」と回答。「ほとんどやった」を合わせると約50%であり改善の余地がある。「Q5. 授業中の取り組み」については「あてはまる」「ややあてはまる」が前期85%であり、後期でも90%と高い傾向を示した。また各学年とも前期より後期の方がその取り組み姿勢に改善がみられた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。」「Q7. 担当教員は、授業の目標や習得すべき事項を、毎回説明していましたか。」について、全学年で「あてはまる」「ややあてはまる」で95%以上を達成している。「Q8. 担当教員は授業の開始時刻を守っていましたか」についても「あてはまる」「ややあてはまる」で95%以上を達成していて、全学的にも最も高い評価となっている。「Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」及び「Q10. 担当教員は、学生に授業への参加を促していましたか(質問等)。」に関しては、「あてはまる」「ややあてはまる」がやはり95%を超え、高い評価であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q13. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」及び「Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。まずQ13について、「あてはまる」「ややあてはまる」が前期では95%以上であったが、後期では90%まで若干下がっている。しかし90%以上を維持していることから、シラバス整備や授業内容の改善の効果が定着したものと考えられる。また、これは全学的にも高い水準である。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q15. 授業は意義あるものでしたか。」について、本問は総合的な授業評価を問う最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられよう。全学年を通し、「あてはまる」「ややあてはまる」が95%を超えている。この結果は、教員の努力もさることながら、学生自身の理解しようとする姿勢がもたらしたものと考えられる。

作業療法学科アンケート結果 (図VI)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、0回が75%、3回までを含めると95%程度と概ね良好である。ただし、3年生(17期生)は欠席が若干増加する傾向が窺える。17期生は前年度の2年次でも同様の結果だった。欠席が多かったのは意識の低い再履修者の影響ではないかと考える。逆に、3年生は、臨床実習を控えているため勉学に対する意識が変わり、欠席は少なくなる。

予習復習について、1年生から3年生までは1時間以上が15%前後と少ない。4年生では1時間以上と回答したものが70%前後となる。1年生には高校時代に予復習の習慣がないために少なく、4年生は過程の大半が臨床実習であるために高いと考える。ただし、4年生の前期のほとんどが学外臨床実習であるのに復習が少ないのは理解できない。学生がケースノート作成などを復習と捉えていない可能性がある。

私語や居眠りについては80%が「あてはまる(していない)」と回答しており、これは教員からの評価とも一致する。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ねシラバスどおりの授業進行であると回答している。学年が進むにつれてシラバスに添っているとの回答が多くなる。

教員の授業内容説明についても同様で、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で90%を超えている。

教員の授業に対する取り組みも(開始時間も含む)、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で90%を超えている。ただし、全学年を通してそもそも私語などは少ない。

授業参加への促しについても同様であり、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。ただし、教員に対する評価で、18期の2年生だけは全体的に低い。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解について、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%前後だが、1年生に少し低い傾向が見られる。しかし、学年が進むにつれて理解度は高まる傾向にあり、3年生以上になると「あてはまらない」との回答は0になる。ただし、18期生の2年生だけは特異的に低い。

学習意欲についても同様で、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%前後である。特に4年生については意欲が高い傾向が見られる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

講義の意義について、「ややあてはまる」を含めると全学年で90%前後だが、「あてはまる」だけを見ると1年生と2年生が低い年がある。しかし、学年が進むにつれて「あてはまる」とする回答がおおくなる。特に18期の2年生は特異的に低い。教員の授業に対する取り組みが、日々進歩していると言ってもそれほどドラスティックな変化ではない。仮に後退していたとしても、やはりドラスティックな後退は考えられない。このクラスによる授業評価はこのクラス独自の雰囲気を表しているものと考えられる。事実、このクラスはまとまりに欠け、勉強会などの集まりも低調で成績も芳しくない。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

以下に 2016 年度の言語聴覚療法学科のアンケート結果を示した。なお、3 年生の後期は 2 名 2 件、4 年生の後期は 1 名 1 件のみのデータであり、3 名とも留年生で当該学年の科目ではないため分析から除外した。

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、いずれの学年も欠席 3 回以内の学生が 95%以上と良好な結果を示している。前期では学年があがるにつれ欠席 0 回の学生が増加している。2 年生で前期に比し後期の欠席回数が多い点については注意喚起が必要である。

予習時間および復習時間は学年により差がみられ、3・4 年生でも 30 分以上学習する学生数が 40%前後にとどまっている。シラバスに記載されている準備学習については、30 分以上行っている学生の割合が 3・4 年生で 60%程度と高かった。一方、1・2 年生では、予習時間、復習時間、シラバスの準備学習のいずれも、ほとんどしなかった学生の割合が高い。後期で学習時間が増加しているものの、低学年での自主的な学習の習慣化が課題であるといえる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスにそった授業、授業目標・修得すべき事項の説明、授業の開始時間、わかりやすい説明や指導については、いずれの学年も 90~95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており教員の授業に対する取組みが高く評価されていた。

学生の授業への参加を促したか、および、講義資料は適切だったかに対しては、4 年前期で 2 割程度が、あまりあてはまらない、または、あてはまないと回答しており検証が必要である。私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていたかに対しては、あてはまると回答していたのは、2・3・4 年生では 90%以上であったのに対し、1 年生では前期 70%、後期 80%と他学年に比し低い結果であった。初年度である 1 年次や、国家試験対策が中心となる 4 年次には、学生の理解度に配慮し、講義資料や指導方法を適宜、見直す必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、および、授業で学習意欲が高まったかに対しては、いずれの学年も 90~95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、授業に対する学生自身の理解度・達成度は高いといえる。しかし、あてはまるだけを見ると前期で学年により差があり、2・3 年生が 80~90%であったのに比し、1・4 年生は 60~70%と低かった。大学の授業形態への導入時期である 1 年次と、多数の国家試験科目の総復習を中心とした 4 年次には、学生の理解度にとくに配慮が必要であることが伺える。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、いずれの学年も 90~100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており高く評価できる。しかし、あてはまるだけを見ると、前項と同様に 2・3 年生に比し、1・4 年生前期が低い傾向があった。学生の満足度を高めるためにも、学科教員間で、各学年の授業の内容や方法について議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

視能療法学科アンケート結果(図Ⅷ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】

①他科に比べ授業への出席率は最も高い。

後期に関しては、授業欠席に対する単位への影響等を指導した結果、欠席者数は減少した。これは、高学年ほど減少傾向が見られた。おそらく、国家試験や就職等、社会人としての自覚が芽生えたことが考えられた。

【学習への意欲的な取り組み】

これも、高学年ほど予習をする人数および予習時間が多くなっていたが、

②反面、Q1～Q3の自主学習時間（予習復習）については

前期と後期を比較すると他科では増加しているが、本学科では変化なし、もしくは若しく減少している。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～Q12のすべての質問において、3～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると90%以上の回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ていた。一方、1～2年次では50%以下であり、基礎科目において低い傾向が見られた。

③Q9～Q12については、本学科でも高い傾向ではあるが、

他学科を含めた全体から見ると学生の満足度が低い。

それは、特に1～2年次の基礎科目で多く観られた。

その理由として、高等学校までとの授業スタイルの違い、たとえば、パソコンおよびプロジェクターを用いて、板書が少ない、あるいは、理系でもこれまで選択していなかった生物学的科目等に対する戸惑いが考えられたことに起因すると考えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

Q13～Q14のすべての質問における、学生の理解度・学習意欲の高まりについても、3～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。しかし、1～2年次は前期・後期ともに50%程度であった。その理由として、上記と同様に高等学校までとの授業内容および授業スタイルの違いが考えられた。大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善に取り組む必要があるだろう。また、授業が判らない場合や、不服、不満等がある場合に学生が気軽に相談や不服申し立てできるような窓口を当科として設ける等の対策を構築したい。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は、3.4年の後期では昨年と同様に90%以上となっていた。一方、1、2年次は前期・後期ともに60%程度であった。

当科においては、1～2年次の基礎科目においても国家試験に準じたカリキュラムを行っている授業もあるが、そうでない授業もある。しかし、国家試験合格のみが、社会に有為な人材の育成という本学の建学の理念における最終目標であるとも限らず、多方面での教養や知識が、本学卒業後にも、役立ちうるといった、広い視野をもって学習すべきとも考える。いずれにせよ、低学年においては、国家試験

合格の役には立たないかもしれないが、興味を持てる面白い授業を行うことで、生涯を通じて、学習とは楽しいことであるということを知って身につけていただければ良いと考える。そのためには、楽しく学習でき、いつでも質問、不満などを気軽に相談できる開かれた自由な雰囲気が必要であると考えます。3,4年次の高学年においては、この雰囲気はかなり構築されていると思われる（国家試験対策が主であるが）。一方、低学年、特に1年次においては、不慣れな点もあり構築されてはいないと考えます。

臨床工学科アンケート結果（図Ⅸ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数は、前期より後期の方が増加する傾向が見られた。特に1年次においては、より専門的な科目が増加するため、留年対策も含め適切な対応が必要である。予習復習の時間に関しては、前期・後期、いずれの学年において、予習と復習の時間は同じ傾向を示した。1年次生は基礎内容が多いため、予習していない学生の比率が他学年よりも高い傾向であった。また、1、2年生では、予習時間よりも復習時間が短い結果となった。全学年とも、予習を行う学生は復習も同様に行っていると推測された。また、4年次生は予習復習の時間が最も長く、国家試験対策に集中していることが分かる。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様の傾向であった。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、後期に増加傾向となった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の開始時刻」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、全学年ともに8割以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測された。今後、アクティブラーニング等の取組を増加させ、引き続き、学生個々の能力を伸ばす指導を継続させることが重要である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

全学年ともに8割以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、今までの学習が十分になされていることが伺える。一方、専門科目が最も多く、講義内容も高度となる3年次後期には理解度、達成度が他のいずれよりも低くなっている。3年生にとってこの時期を乗り切れるかどうか卒業、国家試験合格を左右する傾向にある。2年次までの学習が十分でない学生にとってはこの時期の理解度が低いため、今後本アンケートを基に1、2年次への徹底した指導が不可欠である。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年ともに9割近い学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、授業は意義あるものであったと推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に望んでいたと言える。今後、授業の中に積極的にアクティブラーニングあるいはWeb学習などを取り入れ、一方向型教育の改善が必要であると感じられた。

薬学科アンケート結果 (図 X)

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席3回以下がほとんどであった。ただし、6年後期では、4・5回及び6回以上の欠席がそれぞれ10%であった。

予習・復習については、ほとんどしなかった学生は概ね30~60%程度であった。予習に関しては、6年後期では約10%代と低値であった。復習についても同様の傾向が見られた。また、5年前期では、予習・復習をほとんどしない学生が大部分を占めた（I期実務実習中である事が一つの要因?）。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%を超えており、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みに関する設問では、すべての設問について「あてはまる」、「ややあてはまる」が90%を超えており、ほとんどの教員が真摯に授業に取り組んでいることが伺えた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度については、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価がほぼ90%超であり、良好であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ90%超あった。

動物生命薬科学科アンケート結果（図Ⅺ）

「学生自身の授業の取り組み」

平成 28 年度の欠席回数は、全学年ともに概ね少なかった。その中で、4 年生の前期において 1～3 回の欠席が 50%強見られたが、これは就職活動のためと考えられた。また、後期の 1 年生の 4～5 回の欠席が約 10%強あり、少し多かったが、理由は不明であった。

予習・復習時間は、ほとんどの学年および学期において少なく、「30 分未満～ほとんどしなかった」と回答した学生が 50%前後以上を占めた。特に 1 年生においては、「30 分未満～ほとんどしなかった」と回答した学生が前期では約 80%、後期では約 90%を占めていた。なお、上級生になるに従い、1 時間以上の予習・復習、1 時間以上の準備学習ならびに学習に意欲的な取り組みをする学生は漸増していた。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に関する取り組みに関する各設問に対して、「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は、全ての学年および学期において約 90%以上と多かった。また、上級生になるに従い、「あてはまる」と回答した学生は漸増していた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

ほとんどの学年および学期において、「授業の目標や修得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高まり」の質問に対して、「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は 90%以上であり、理解度・達成度は高かった。また、上級生になるに従い、「あてはまる」と回答した学生は漸増していた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

ほとんどの学年および学期において「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は 90%以上であり、「授業は意義のあるもの」と回答した学生が多かった。また、上級生になるに従い、「あてはまる」と回答した学生は漸増していた。

生命医科学科アンケート結果（図 XII）

「学生自身の授業の取り組み」

2015 年新設学部のため、1, 2 回生のデータのみである。授業欠席回数 0~3 回は、前期がほぼ 100%、後期がおよそ 98%であった。学生の授業出席率は大変良好であった。予習・復習については、予習を 1 時間以上行った学生は前期・後期を通して、10%未満であった。復習を 1 時間以上行った学生はおよそ 20%であった。予習を 30 分未満~ほとんどしなかった学生は前期・後期を通しておよそ 82%であった。復習を 30 分未満~ほとんどしなかった学生は前期・後期を通しておよそ 60%前後で、全体的に予習より復習に時間をかける傾向が認められた。しかしながら全体的に学習時間が短いのは今後改善する必要のある事案であると認識した。「学習に意欲的に取り組んだか」という設問に対しては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%前後であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそった講義かどうか」、「授業の開始時刻は守られていたか」、「授業中の静穏な雰囲気は保たれているか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%前後であった。ほとんどの学科教員の講義は高評価であった。「担当教員はわかりやすい説明や指導を行ったか」についての設問でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期通しておよそ 90%であり、概ね学生の満足度は高いことが伺われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期ともに、およそ 90%であった。「授業で学習意欲が高まったか」についての設問でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期を通しておよそ 90%であった。このことから概ね学生の満足度は高いと思われる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「授業は意義あるものだったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 92%であった。少数の学生を除いて、大多数の学生は自身の将来の目標を定めたことで、学生自身の理解度・達成度が高くなったことが推察された。